美術実技講座

「蟬丸×招き猫！絵付けワークショップ」

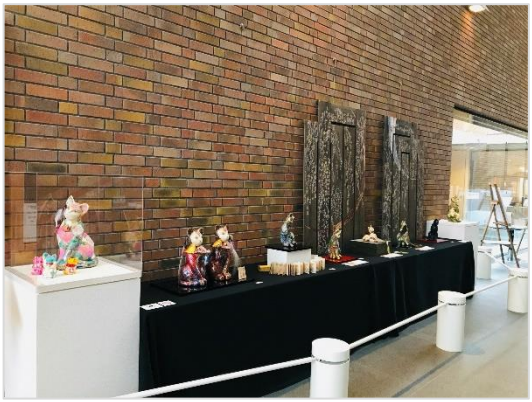
日　　時：令和２年３月８日（日）
①午前 10 時～11 時 30 分、②午後２時～午後３時 30 分

講　　師：立体造形作家・蟬丸さん
1992 年、北鎌倉に工房＜蟬丸＞を開設。以降、パリ、台湾、日本各地で企画展を開催、《蟬丸源氏物語》シリーズなどの猫のオブジェ作品を発表する。2018 年には、「パリ NEKO コレクション 2018」日本会場 Bunkamura Boxgallery、台湾「台北 infinity art show」に出品。2019 年には、前橋ギャラリー・オーツー、下北沢ギャラリーHANA で個展を開催。2020 年 3 月からは、名古屋駅ミッドランドスクエア B1F、箸ギャラリー門 名古屋店で作品展を開催。

対　　象：一般（小学生以上、小学１～３年生は保護者同伴）
参加人数：46 名
【午前の部】20 名（子ども 11 名、大人９名）
【午後の部】26 名（子ども９名、大人 17 名）
参 加 費：中サイズ 1,500 円、 大サイズ 2,000 円
※素焼きのサイズ毎に参加費（材料費）が異なります。
職　　員：大村、長岡、野田、名和

美術実技講座は、アーティストの造形表現や制作活動について、実際に手を動かしながら参加者に体験してもらうことを目的とした、教育普及プログラムです。

今年度は、猫をモチーフに優美で幻想的なオブジェを手がける立体造形作家・蟬丸さんを講師とした絵付けワークショップを開催しました。鎌倉を拠点に日本各地でイベントや作品展示を行っている蟬丸さん。一宮でのイベントは初めてということで、当館のロビーでも、1 月中旬からワークショップ当日まで、蟬丸さんの作品展示を開催しました。



当日のワークショップでは、まず受付時に、自分が絵付けする招き猫の素焼きのサイズと型を選んでもらいます。素焼きは中サイズの「玉菊」、「空蝉」、大サイズの「八重菊」の３種類で、すべて蟬丸さんがアトリエの窯で焼き、制作したオリジナルのものです。招き猫は右手で「金運」を、左手で「人脈」を招くといわれており、それを聞いた子どもたちの中には「どっちがいいかな？」と真剣に考えてしまう子も。

全員が素焼きを選んだあとは、さっそくワークショップの開始です。

最初に蟬丸さんより、ふだんの作品の制作活動について、画像とともにご紹介いただきました。写真は、今回、補助スタッフとしてワークショップの運営も手伝っていただいた一宮市在住の写真家・小森正孝さんが撮影したものです。写真を見ながら、蟬丸さんのアトリエのある鎌倉という土地や、工房の様子、作品に込めた意図について聞き、貴重なアーティストの制作風景を知ることができました。

お話を聞いた後は、実際に手を動かして、制作活動を体験します。

今回のワークショップで使う絵の具や筆は、蟬丸さんが実際に作品制作に使用しているものとまったく同じものです。絵の具は素焼きに染み込むのが早く、重ね塗りもできるため、「はみ出したり間違えても直すことができるので、失敗を恐れずに描きましょう！」という、蟬丸さんからのアドバイスを受けつつ、まずは大きな筆を使って招き猫のからだ全体にメインの色を塗っていきます。招き猫にオーソドックスな白を塗る方もいれば、紫や水色、緑といったビビットな色彩を塗っていく方も。こどもたちは迷いなく大胆に塗っていきます。部分的に色を変えて塗るなど、大人では思いもつかないような色使いで、見守るスタッフも「個性豊かな作品ができあがることまちがいなし！」と感じるほどでした。

塗り終わった人から、今度は招き猫の柄を描いていきます。事前に、描きたい模様があればイラストや画像を用意してきてください、とお伝えしていたこともあり、みなさん持参した展覧会図録や下書き、大好きなマヌルネコ（！）等の画像を見ながら、少し細めの筆を使って細部の模様を仕上げていきます。

最後に一番細い筆で描くのは、招き猫の顔部分です。ただ、この顔を描く作業に一苦労。招き猫の表情が決まる大事な段階になりますので、みなさんとても慎重でした。

できあがった方から、蟬丸さんのところへ持っていき、順番に絵の具がはがれないようコーティングをしてもらいます。その後、ドライヤーで乾かしたら完成です！最後には、できあがった招き猫をもって蟬丸さんと記念写真を撮ったり、友だちの作品と並べて見比べたりしていました。時間のぎりぎりまで描きこんでいる大人の方やこどもたちもたくさんいて、できあがった作品は歌舞伎のような化粧の猫や、音符模様のファンタジックな猫など力作ばかりでした。

現代アーティストとして活躍する作家から、直接教えてもらえる美術実技講座。今回は、一宮から離れた鎌倉より、講師をお招きしてのイベントとなりましたが、「もともと作家さんのファンで、直接習えると聞いて参加しました！」という声や、「先生と同じような猫はできなかったけど、自分だけの猫ができあがって良かった」といったうれしい声をいただけました。今後も、作家と参加者のみなさんをつなぐような、楽しみながら美術に触れあえるイベントを企画していきたいと思いました。（学芸員　大村）